

関東支部だより

関東支部見学会 印象記

宮崎 雄二

6月12日(金)、関東支部企画による見学会に参加し、茨城県大洗町にある(株)千代田テクノルの施設を見学させていただきました。大洗町には千代田テクノルの施設として、大貫台事業所と成田町事業所の2施設があり、今回はその両施設を見学しました。

梅雨入り直後であり自宅を出るときは、あいにくの天気でしたが、集合場所である鹿島臨海鉄道の大洗駅に着く頃には小雨となっていました。これも関東支部員の方々の日頃の行いが良いからでしょうか？

午後1時、総勢18名でバスに乗り込み、初めに見学する大貫台事業所に向け大洗駅を出発しました。

大貫台事業所

大貫台事業所は平成25年に新設された事業所で、ラディエーションモニタリングセンターと呼ばれる、国内のガラスバッチ全般の業務を行う測定センターに加え、茨城営業所、コンベンションセンターが併設されています(写真1)。

まずは、コンベンションセンターにて千代田テクノルの事業概要及び本日見学する2事業所についての説明をしていただきました。千代田テクノルが、日常行われる放射線管理業務の全般に携わっていることは、皆様ご存知のことだと思いますが、今後Tcジェネレーターの国内供給など、より広範囲にわたる放射線関連業務を展開していくというロードマップを説明して



写真1 大貫台事業所外観

いただきました。

医療領域の検査で多く利用されているTc製剤は、国際情勢等により供給が不安定になることがあります。アイソトープ協会の方をはじめ関係各所の皆様の協力により、業務が滞ることはありませんが、国内供給が行われることは、利用者の大きな安心に繋がるので大きな期待をしたいと思います。

また、千代田テクノルでは福島県の方々を中心に、未だに20万人以上の方の個人被ばく線量測定を行っているとのことでした。東京電力(株)福島第一原子力発電所での事故以降、放射線業務に携わる我々だけでなく、公衆の線量管理も大規模に行われていることを改めて認識しました。この被ばく線量測定には、“Dシャトル”という新たな線量計を利用し始めているとのことでした。ガラスバッチと違い測定期間ごとでなく、1日単位での線量や現時点での積算線量などを、リアルタイムで確認できる点、交

換期間が長く利用できる点などを考慮すると、放射線業務従事者の被ばく管理用に提供されることを早期に望みます。

見学した測定センターは、施設が新しく清潔に管理されており、入室には帽子と靴カバーの着用など食品工場と同じような管理が行われていました。センター内では、ガラスバジのケースの組み立てから、発送、使用後の線量測定、そして再利用するための処理が各所で行われていました。最新の施設ということだったので、オートメーション化され機械による作業が全てだと思っておりましたが、精度や効率性が重視される作業では、人の手による作業が取り込まれており、利用者が困らないように細やかな配慮がされていることを見ることができました(写真2)。

成田町事業所

大貫台事業所を後にして、測定器の校正事業を主に行っている成田町事業所を訪れました。こちらの施設は、 γ 線、中性子線、 β 線、X線を線源とした各種測定器や個人線量計などの校正を行う施設です。中性子照射室を除くと、測定室は思いの外コンパクトでした。こちらの施設は、東日本大震災で被災したとのことでしたが、その際にも照射装置の移動や転倒などの被害がなかったことに驚きました。

最後にこちらの会議室を借りて小休憩を取った後、千代田テクノルの方々とは質疑応答の後、



写真2 測定センターの見学風景

バスにてJR水戸駅へ移動し解散となりました。

一部の参加者はJR水戸駅近くで行われた懇親会にて更に放射線談義に花を咲かせました。

今回見学させていただいた、ガラスバジや測定器の校正等は、日常の管理業務で利用しており、理論的には理解しているつもりでしたが、実際に測定センターや校正施設を見学してみると新たな発見があるとともに、今までの知識を更に深めることができました。今回初めて見学会に参加させていただき、とても良い経験を積むことができたと思います。

お忙しい中、施設見学を快くさせていただいた千代田テクノルの皆様に感謝するとともに、企画、実施に関わられたスタッフの皆様にお礼申し上げます。

(北里研究所 北里大学メディカルセンター)

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】

上養義朋(委員長)、池本祐志、川辺 睦、鈴木朗史、廣田昌大、藤淵俊王、宮本昌明、吉田浩子